

不動經海義

特 260 7

758



始



特260
758

邑樂泉人譯述



不動經講義

東京 三盛堂藏梓



漢城安達謙藏閣下題字



高生

漢城



不道獨精美

自序

不動經は其の意味が中々深遠であつて、之を平易に解釋するといふことは余輩の如き淺學の者には頗る至難の業であります。曩に杜撰をも憚らず上梓したものが、幸にも數版を重ね得ましたので、今度、村井宏全師の加筆を冀ひ、改訂補修して再び刊行することに致しました。纒なりとも信者を益する所があれば、補修者への感謝と延ては譯者の悦は是れに堪へない次第であります。

昭和拾稔乙亥孟春改版に際して

邑樂泉人識

不動經講義

邑樂泉人講述
村井宏全補修

聖無動尊大威怒王秘密陀羅尼經

この御經は不動明王の御威徳を稱讚し奉つたもので、寔に甚深の意義を藏した御經である。不動明王には五つの御名があり、一に常住金剛、二に聖無動、三に風動、四に風童、五に不動と申し、此御經では第二の御名を用ひてある。聖は聲に通じ『一切世間の聲を聞いて諸の情を知るを聖といふ』

とあつて、最高の覺即ち佛の大覺を意味する。本來この明王は宇宙の大眞理を表象した大日如來の一體分身なる故に聖といふので、無動とは『宇宙の眞理は東西古今を通じて絶對に變ることの無いもの』であることを表したものである。

尊は此の明王を崇め奉つた敬稱である。また大威怒王とは明王の御異名で、慈悲忍辱の佛體を隠して忿怒の形相を顯し給ひ、大威徳を以て一切衆生を助け給はんとて、『善を覆はんとする惡』を懲しめ給ふ御姿を其儘御名に稱へ奉つたのである。秘密の二字は眞言宗の奥旨で、甚深至極の理義があるが今茲に書き盡すことができないから省畧する。この眞言秘密の法は久遠の昔大日如來から金剛手菩薩に授け給ふたものである。それが其後、

龍智、金剛智、不空、惠果等の高僧に傳はり、遂に弘法大師によつて我國に弘通せらるるに到つたのである。陀羅尼の三字は梵語で「眞言」と同じ語で、功徳を意味し、また秘密の呪を意味する語である。

經はたていど、すぢ、みち、などと訓み「絶對不變の正義・東西古今を通じて眞理」を意味し、其の教を記した書物をも經といふ。これは佛書のみに限らず、儒書にも詩經、易經、書經、孝經、などの書がある。

爾時毗盧遮那大會中有二菩薩

爾の時、毗盧遮那大會の中に一の菩薩摩訶薩あり。

爾時とは如來が此の御經を説き給ふた時をさしていふたのである。毗盧遮那は梵語で、毗は最も高く顯れるの義、盧遮那は「廣眼」とて、廣く光りある眼を以て大千世界を見張りたまふ佛の御婆で、之を翻譯して遍照王如來といひ、此の光明が遍く煩惱の闇を滅するを日光に偷へて大日如來と申し上げる。この如來が説法の大會を催された時、數多の聽衆中に衆に勝れた一人の大菩薩が居られた、菩薩とは一切衆生を救はんどの大誓願を以て無上の覺を修したまふ方をいふ、摩訶薩は梵語の「大」で、菩薩中の權威者を大菩薩即ち摩訶薩といふのである。

名曰金剛手與妙吉祥菩薩俱。

名けて金剛手と曰ふ。妙吉祥菩薩と俱なりき。

金剛手菩薩は前にも云ふた如く、大日如來から直接に眞言秘密の法を授かつた方。妙吉祥菩薩は金剛手菩薩の兄君で、共に阿彌陀如來の御子である大日如來の説法の坐に列なつて居られた。

此金剛手是法身大士是故名普賢。

此の金剛手は、是の法身の居士なり。是れ故に普賢と名く。

法身は遍一切處といふて、太陽の光の到らぬ限なきが如く一切の處に遍き眞理の御佛をいふ。又己が身を顧みず他を利せんとする大慈悲に満ちた方を大士といひ又菩薩といふ。此の菩薩は諸佛中で第一の賢者である故に

普賢菩薩の名がある。普は普くと訓み法體遍滿の義である。この菩薩は胎藏界の辰巳に在し、秘號を建立如來と申す

即從如來得持金剛杵其金剛杵。

五智所成故名金剛手。

即ち如來より、金剛杵を得持す、其金剛杵は五智の所成なるが故に金剛手と名く。

これは大日如來が眞言秘密の大法を金剛手菩薩に授け給ふたことをいふたのである。金剛杵とは煩惱を摧破する法器で、大日如來の五智を表して作られたものである。如來の五智とは、法界體性智、大圓鏡智、平等性智、

妙觀察智、成所作智の五で、之は無上甚深の諸佛の大智力をいふたものである。大日如來は諸佛全體の總帥であらせらる故、諸佛の大智力を悉く一身に兼備したまふのである。

又妙吉祥菩薩。是三世覺母故。名文殊師利。

又妙吉祥菩薩は是れ三世覺母の故に文殊師利と名く。

妙吉祥とは、一切衆生の爲に美妙なる吉祥即ち幸福を授け給ふので其名がある。三世覺母とは此方が佛智甚深に在し、過去・現在・未來の三世十方を見透し給ふので一切衆生より慈母の如く或は師の如くに慕ひ仰がる、

をいふ。此方は諸佛諸菩薩中、第一の智者で又の御名を文殊師利と申し、秘號を無戲論如來と申し上げる。胎藏界の未申の方に在し左右の御手に寶篋と利劍とを持したまふ。因みに文殊とは有無相通する妙智力をいふ。

如^レ是^レ菩薩爲^レ度^ニ衆生現^ニ菩薩身。

是の如く菩薩は衆生を度せんが爲に菩薩身を現じ。

菩薩には下位の菩薩と上位の菩薩とがある。前者は佛たらんと志して菩薩行を修せらるゝ方をいひ、後者は久遠の本佛が衆生濟度の爲に、佛位にあつては衆生との隔りがあり過ぎるので、自から御位を下して菩薩身を現じ給ふをいふ。前述の建立如來の金剛手、無戲論如來の妙吉祥の兩菩薩に於

けるが如きが其れである。

成就戒定慧解脱知見善能 通達諸陀羅尼門。

戒定慧解脱、知見を成就し、善能諸の陀羅尼門に通達し給へり。

戒定慧とは律經論三つを能く藏めたるをいふ。律とは戒律のことで五戒十戒などをいふ佛の誠である。眞言宗などではこの戒を持つ修行として百日間道場に籠つて精進潔齋をして信心する、五戒とは殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒の五惡を行はぬこと、十戒は十善戒ともいふて前述の五惡の他に惡口、嫉妬、瞋恚、憍慢、邪見の五つを慎むことである。是等の戒を始と

して數多の戒があつて、それを守ることを戒解脱といふ。諸經を能く解通して解脱するを定の解脱といひ、經論に通じてゐるのを慧の解脱といふ。是等が戒定慧三學の解脱である。解脱とは衆生の凡身に纏ふた種々の煩惱を拂ひ捨てること、知見とは佛智と識見をいふ。また諸陀羅尼門とは密乗の極意を總稱したのである。これは前述の二菩薩が大日如來からの傳承によつて眞言密乗の極意の總てに通達せられたことを云ふたのである。

其心禪寂常住三昧。

其の心禪寂にして、常に三昧に住し。

これは菩薩の御心の如何に寂かなるかをいふたのである。禪寂とは寂かに

禪定に入ること、禪定とは妄想邪念を滅却して無念無想となつて佛の御心に没入すること。それには先づ方法として坐禪を行ふが坐禪にも二様あつて、如來の坐を結跏趺坐といひ、菩薩の坐を半跏趺坐といふ。大日如來も金剛界では結跏趺坐、胎藏界では半跏趺坐を爲し給ふ。三昧とは心身息の三つを調へてその統一を計ること、眞言宗では阿字觀といふ、總て心身を統一し心を或る一事に没入して更に他念の無いことを三昧といふ。

降伏衆魔令入正見得大智慧無有障礙。

衆魔を降伏して正見に入れ、大智慧を得せしめ、障礙あること無し。

之は二菩薩の御徳に因つて諸の悪魔を退治し、其の邪見の心を入替へ正し

い識見を授け大智慧を得させ給ふから、衆生は悪魔の障礙から免かれる。

正見は八正道の第一で、大品經によると、正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定を八正道分といふてゐる。

能隨衆生轉大法輪。

能く衆生に随つて大法輪を轉じ。

大法輪は普賢菩薩の持し給ふ金剛不壞の法器で輪寶とも云ひ、諸悪煩惱を摧破するに用ゐる。この意味で佛菩薩の御心、或は佛法自體をも法輪といふ。之は衆生の意に随つて利益を給ふことをいふたのである。

吹解脫風除衆生熱惱雨大法雨。

澍衆生心地殖善根種。

解脫の風を吹かして衆生の熱惱を除き、大法の雨を雨して衆生の心地に澍ぎ善根の種を植え。

炎天の下を歩いて苦み喘く人が遇々森の蔭などに憩ふて涼風を身に受け心身共に爽快になる様に、人生行路の苦熱憂惱を悉く拂ふて下さる佛の慈悲を解脫の風といふ。大法雨とは、雨が萬物を濡す態を佛の慈悲に喩へたので、心地とは心の底といふことである。之は信仰の力に佛の慈悲が加つて、邪悪煩惱を解脫して心の底に善が萌して來たことをいふたものである。

亦能具足秘密之藏。

また秘密之藏を具足せしむ。

是は衆生に眞言の奥儀を授け給ふことをいふのである。

其心自在。或現多身。復合多身。以爲一身。

其心自在にして或は多身を現じ、復多身を合して一身と爲し。

菩薩は通力自在に在して、或る時は多身となり、或る時は一身となり有ゆる方便を盡して一切衆生を助けたまふのである。

隨衆生願能與悉地。以宿願藥療衆生病。

衆生の願に隨つて能く悉地を與へ宿願の藥を以て衆生の病を療す。

人々面の變る如くに各々願ふ所も異なる。其裡にも順當な願もあれば、桁のはづれた逆な願もあるので、順には順を以て利益し、逆には逆をもつて制し、悉く願を成就させて下さる。悉地は成就と翻譯さるべき梵語である。宿願とは永い間に掛けての願をいふので、一七日、三七日乃至百日千日と信心の功德を積んだものを宿願の藥といふ。菩薩は此の藥を以て衆生の煩惱憂苦の病を療し給ふのである。

是大菩薩戴五髻冠顯五種智慧。

是の大菩薩は五髻の冠を戴き、五種の智慧を顯はす。

是の大菩薩とは金剛手菩薩の御事である。五髻の冠は大日如來の五智を顯したものである。

智慧如日月照諸暗冥。

智慧は日月の諸の暗冥を照すが如し。

智は心の體、慧は心の作用で、我が心の明かなるを智といひ、人を説き諭すを慧といふ。此の智・慧二つながら欠けると人は愚かになる。恰も明月が雲に覆れた様に智慧の力によつて五欲煩惱の雲を拂へば心の日月は煌々

と清淨の光を照して諸の幽冥を除くのである。之は兩菩薩の御徳である。

常為人天之所恭敬設大法船普

度苦海令到彼岸。

常に人天の爲に恭敬せられ、大法の船を設けて普く苦海を度し、彼岸に到らしむ。

人天とは人及び天人といふこと、天人は諸佛諸菩薩其他天上界の方々いふ。金剛手、妙吉祥の兩菩薩の功徳が廣大な爲に斯く崇められるのである。大法船とは御法を船に譬へ、苦海は浮沈限りなき人生を海に譬へたので、法の御船を以て荒浪を乗り切つて一切衆生を洩さず大日如來の在す覺の彼岸

に濟度して下さるのである。彼岸とは佛の世界をいひ、娑婆世界を此岸といふ。

心無傾動不染塵垢能誘衆生令

見妙色。

心に傾動無く、塵垢に染まず、能く衆生を誘ひて。妙色を見せしむ。前述の御利生で迷といふものが悉く拂ひ捨てられるから心は最早大盤石で傾いたり動いたりするやうなことは絶對になく、塵にまみれ垢によごれるやう事も決してない、其の清淨堅固な心は自から顔色に現れ、常に麗しい晴々した姿を以て人に對することが出来るのである。

如是功德甚深無量設經多劫讚

不能盡。

是の如く功德甚深なり、設へ多劫を経て讚ることも盡すこと能はず。

斯様に功德が澤山あるので、如何に永い時間をついやすとも讚め盡すことはできぬ。多劫の劫は無量時間の單位で巨大な箱に芥子を盛入れ其を三年毎に一粒づゝ取つて箱の中の空になる時を一劫といふ、或は又山の様な巖を三年に一度づゝ天人が天降つて羽衣で撫でさすり、すりへらして了つた時を一劫といふ。如何に永いものであるかはをして知るべしである。

是二菩薩成就如上殊勝功德。

是の二菩薩は上の如き殊勝の功德を成就したまへり。

金剛手、妙吉祥の二菩薩は前述の様な十方の諸佛に勝れた有り難い功德を衆生に授け給ふといふ大誓願を成就したまふたのである。

於是金剛手菩薩入火生三昧其光普照無邊世界。

是に於て金剛手菩薩、火生三昧に入り、其光は普く無邊世界を照す。

菩薩は常に三昧に住し給ふけれども、衆生の塵垢と煩惱とを断つには火生

三昧が第一とされてゐるので其の定に入り給ふので、其の光明は大千世界の無邊の果までも残る所なく照り渡るのである。

火焰熾盛焚燒諸障。

火焰熾盛にして諸の障りを焚燒す。

三昧の焰の燃ることが烈しいので、種々の煩惱を悉く焼き盡して了ふ。不動明王の御姿は此火生三昧に入り給ふ所を寫したものである。

内外魔軍恐怖馳走欲入山中不能遠去欲入大海亦不能去。

内外の魔軍、恐怖して馳走し、山中に入らんと欲すれども遠く去るこ
と能はず、大海に入らんと欲すれども亦去ること能はず。

内外の魔軍とは心の内外から襲ふて来る三毒煩惱を惡鬼惡魔に譬へたので
ある。金剛手菩薩の火生三昧によつて發つた火焰の功力で大千世界に充滿
した煩惱の魔軍は身の置き所がなくなつて逃げまごふのである。

舉聲大叫唯至佛所請乞救護捨
於魔業發大悲心。

聲を擧げて大いに叫んで唯佛所に至りて救護を請乞し、魔業を捨て大
悲心を發す。

身の置き所の無くなつた魔軍達は據どころ無く大聲をあげて泣き叫び、大
日如來の御許に至り懺悔して救ひを請ひ、如來の御教化によつて惡心を翻
へして善心に立返つて大慈悲心を發すやうになる。

釋提桓因梵天王等捨深禪定樂
來入此處天龍八部皆悉來至菩
薩之所作禮而坐。

釋提桓因、梵天王等、深禪定の樂を捨て此處に來入し、天龍八部皆悉
く菩薩之所に來至し、禮を作して坐す。

大千世界即ち大宇宙を欲界、色界、無色界の三段に分ち、之を三界といふ。此欲界の天の中に刀利天といふ天があり、其處の王様を帝釋天又は釋提桓因といふ。そして欲界の天の上に色界の天があり、其の中の初禪天の王を梵王又は大梵天王といふ。深禪定樂とは深所に隠れて禪定三昧を樂むことをいふ。斯様な御方すら深い禪定を捨て金剛手菩薩の御許へ參詣せられる。天龍八部とは、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等の八部衆をいふ。天とは欲界、色界、無色界の三界諸天に住する天人をいふ。龍は天帝の宮殿を守り雨を降らせたり火を鎮めたりする。夜叉は空中を飛行する鬼神である。乾闥婆は帝釋天の樂神で、須彌山の南、十寶山中の金剛窟に住んで香料ばかりを食してゐる。姿は鳥で常に天帝の

音樂を奏する。阿修羅は修羅道の大將で常に鬪争のみを事としてゐる鬼神である。迦樓羅は後に説く金翅鳥のことである。帝釋天の樂神で額に一つの角がある。乾闥婆の妻。摩睺羅は大蟒ともいひ蛇神である。人非人とは以上の八部衆は皆人に似て人に非ずといふことで八部衆を總稱したものである。斯の如く天人を始め人非人に至るまでも來つて禮拜供養して其の説法を聽聞することゝなつた。

是れまでは此の御經の序文の如きもので、大日如來から眞言の奥儀を傳授せられた二菩薩の御徳を稱讚したもので、之より金剛手菩薩が自から不動明王の御功德を説き給ふのである。

爾時金剛手從三昧起告妙吉祥

菩薩言有大威怒王名曰阿利耶

阿闍羅拏多尾地耶阿羅惹

爾時金剛手、三昧より起て妙吉祥菩薩に告げて言く、大威怒王あり、

名けて阿利耶阿闍羅拏多尾地耶阿羅惹と曰ふ。

爾時とは前述の如く兩菩薩の御徳を慕つて釋提桓因、梵天王、天龍八部を

始め一切衆生の大衆が大日如來の説法の坐に集つて來た時をいふたのであ

る。其時に金剛手菩薩は禪定の坐より立ち給ふて妙吉祥菩薩に御談しある

には、爰に大威怒王と申す御方が在す。其の御名を阿利耶云々と申上げる

と。此の阿利耶云々の十四字は陀羅尼門の秘語で極めて意義深い言葉であ

る爲に誤譯を恐れて翻譯せず梵語の儘で申すのである。判り易く申せば大

日大聖不動明王と解すべきであらう。

是大明王有大威力以智慧火燒

諸障礙亦以法水漱諸塵垢

是大明王、大威力あり、智慧の火を以て諸の障礙を燒き、亦法水を以

て諸の塵垢を漱ぎ。

明王は五智の如來の中央なる大日如來に在すゆゑ、天に在つては虚空藏菩

薩と現じ、地に在つては地藏菩薩と現じ給ふ。斯の如くに諸の佛體に分身せられて一切衆生を濟度し給ふ其功力を明王の大威力と申すのである。智慧火とは明王の御身より現し給ふ焰、法水とは明王座し給ふ盤石の下から流れ出る水をいふ。淨火が能く穢を焼き拂ひ、清水が能く汚物を洗ひ潔める如くに明王の智慧と御法の御徳は諸の煩惱を滅却するのである。

或現大身満虚空中或現小身隨

衆生意

或は大身を現じて虚空の中に満ち、或は小身を現じて衆生の意に隨ふ。如來の光明の大字宙に遍満する如く、明王の大威力は大にしては能く世界

國家を利益し、小にしては衆生一人々々の心の中を住居となし給ふて能く凡夫の願事を叶へたまふ。

如金翅鳥噉諸毒惡

金翅鳥の如く諸の毒惡を噉しが如く。

金翅鳥は梵名を迦樓羅といひ一切の鳥類の王として迦樓羅王といふ。兩翼が金色で其長さ實に三百三十六萬六千里もあるといふ。常に口から大火焰を吐く。此の焰を迦樓羅焰といふ。此の鳥は惡龍を捕へて食し、毒氣を吸ふので、之を明王が衆生の煩惱を斷ち給ふに譬へたのである。漢書に大鵬とあるは此の鳥である。

亦如^ニ大龍興^ニ大智雲^ニ而灑^ニ法雨^ニ。

亦大龍の如く大智の雲を興して法雨を灑ぐ。

龍は水屬の王で、隠顯自在の通力を有し、潜む時は硯水にも入り顯るゝ時は海水をも狹しとする。或は雲を起し雨を降す、之は明王の大威力を大龍に譬へたので、大智の雲を興して慈悲の法雨を灑いで衆生の心を沾し給ふ。

如^ニ大刀劍摧^ニ破魔軍^ニ。

大刀劍の如く魔軍を摧破し。

明王の大威力は鋭い劍の如く煩惱の魔軍を打ち摧き、或は打ち破り給ふ。亦この魔軍を現實の軍兵と見る時は天慶の亂の將門の如き明王の大威力に

因つて滅亡したことは成田不動尊の縁起に依つて明かである。

亦如^ニ絹索縛^ニ大力魔^ニ。

亦絹索の如く大力の魔を縛し。

絹索とは縛り繋ぐの義で、煩惱の魔を縛り給ふ繩のことである。明王が右の御手に大利劍、左の御手に絹索を持し給ふは何れも大功德を形の上に顯したまふたものである。

如^ニ親友童子^ニ給仕行人^ニ。

親友童子の如くに行人に給仕し給ふ。

明王は大慈悲の法體なれば、衆生に對すこと親の子に對するが如く、親友

に對るが如く、子の親に對するが如く、時に奴僕の姿にまでなつて衆生の濟度の爲めに盡して下さる。行人とは修行者をいふ。

其心不驚住不動定。

其心驚かず、不動定に住せしむ。

其心とは不動明王を信する人の心である、不驚とは水難、火難、劍難、其他如何なる災難、艱難に遭遇するとも少しも動する心なく、何時も安きに居ることが能きることをいふ。不動定とは、泰山崩るゝとも動せずとの大決定心を以て禪定に入ること、之は、大盤石の上に坐し給ふ明王の心その儘であつて、明王は一切衆生に此の勇猛心を御授け下さるのである。

これは觀世音菩薩の施無畏といふに同じである。

是大明王無其所居但住衆生心

想之中。

是の大明王は其の居する所なし、但衆生心想之中に住したまふ。

眞理の法體たる不動明王には一定の住居といふものがなく、衆生各々の心の中を住家となし給ふ。心想とは信の心即ち妄想邪念なき明朗鏡の如き心をいふ。斯の如き心の中にこそ明王は宿し給ふのである。明王の尊像は心の臟を象つたものであるとの説がある。

所以者何。虚空广故。世界无边。世

界无边。故。众生界广。众生界广。故。

法身体广。法身体广。故。徧法界。徧

法界。故。以无相为体。无相而有相。

随行者。意现其形体。

所以は何か。虚空廣きが故に世界も無邊なり、世界無邊なるが故に衆生界も廣し、衆生界廣きが故に法身の體も廣し、法身の體廣きが故に

法界に徧し、法界に徧きが故に無相を以て體と爲す、無相にして而し

て相あれば行者の意に随つて其の形体を現す。

所以者何とは前段に對する疑問で、「明王に住む所が無いとは何ういふ譯か、衆生の心想の中に住するとは何ういふことか」といふのである。虚空

とは天または空間と云こと。世界とは大千世界即ち宇宙のこと。衆生界と

は迷の世界即ち六道輪廻の世界。法身體とは覺の實體即ち佛の御心をいふ。

法界は佛の世界、迷の世界に對する覺の世界をいふ。即ち、空間には邊し

のない廣さがある。故に其空間の全部を占めてゐる宇宙の廣さも無邊であ

る。宇宙が無邊であるから其の宇宙間に存在する六道に輪廻して止むこと

のない衆生界も廣く、其六道輪廻の衆生を攝取して限りなき慈悲の本體た

る法身體も亦極めて廣い譯。此慈悲の本體は大日如來で、法界に普く徧満して居ることは前にも充分述べた筈此限りのない法界に満ち擴がつて居るといふからに形は有り得ない。形あるものには大きさに限りがある。然し形がないからといふて無いのではなく之が無相を以て體と爲すといふことである。肉眼では拜めぬが心の眼にはちやんと映じ給ふのである。

其身非有非無非因非縁非自非
他非方非圓非長非短非出非没
非生非滅非造非起非爲作非坐

非臥非行住非動非轉非閑靜非
進非退非安危非是非非得失
非彼非此非去來非青非黃非赤
非白非紅非紫非種種々色

其身有に非ず、無に非ず、因に非ず、縁に非ず、自に非ず、他に非ず、方に非ず、圓に非ず、長に非ず、短に非ず、出に非ず、没に非ず、生に非ず、滅に非ず、造に非ず、起に非ず、爲作に非ず、坐に非ず、臥に非ず、行住に非ず、動に非ず、轉に非ず、閑靜に非ず、進に非ず、

退に非ず、安危に非ず、是に非ず、非に非ず、得失に非ず、彼に非ず、是に非ず、去來に非ず、青に非ず、黄に非ず、赤に非ず、白に非ず、紅に非ず、紫に非ず、種々の色に非ず。

之は、明王が有無を超越した絶對的存在であつて、宇宙法界に徧滿して一切衆生の心想の裡に住し給ふことを註した文である。

唯圓滿大定智慧無不具足。

唯大定の智慧を圓滿して具足せずといふこと無し。

大定の智慧とは最高無上の佛智をいふ。明王は此の無上の佛智を圓滿に具足し給ふて、微塵も欠けた所がない。

卽以大定徳故坐金剛盤石。

卽ち大定徳を以ての故に金剛盤石に坐し。

大定徳とは明王の火生三昧の御徳で、衆生濟度の爲に金剛盤石の上に坐して不動定に入れ給ふをいふ。金剛とは如何なる困難誘惑にも打勝つことのできる力、之を金剛力又は金剛心といふ。

盤石は衆生の罪障を表したもので、其の上にとツカと坐して動かし給はぬは不動定の御徳である。

以大智徳故現迦樓羅焰。

大智の徳を以ての故に迦樓羅焰を現し。

大智徳とは一切衆生の煩惱を焼き盡さんとする明王の大智をいふ。其大智
力に因つて迦樓羅焰といふ火焰を御身より現じ給ふ。此迦樓羅とは前にも
述べた如く金翅鳥のこと此鳥が諸の悪龍を喰ひ口から火焰を吐き諸の毒氣
を焼くところから明王の焰を此鳥に比べて迦樓羅焰といふのである。明王
の尊像を能く拜すれば火焰の中に鳥の頭の如きものがあるのを見るであら
う。是れが金翅鳥である。

以大悲徳故現種種相貌

大悲の徳を以ての故に種々の相貌を現じ。

大悲徳とは一切衆生を救ひ給はんどの大慈大悲の御心をいふのである。

故に時に應じ所に應じて種々様々の御姿を現じ給ふ。本来明王は大日如來
の所成で、煩惱惡魔降伏の爲に出現せられたので、其他天にあつては虚空
藏菩薩と現じ、地にあつては地藏菩薩として現じたまひ、閻魔大王も亦こ
の如來の所成によるのである。

其形青黒似暴惡相

其形青黒くして、暴惡の相に似たり。

青黒の色とは貪瞋癡の三毒に配したもので、貪とは欲のみ深くて慈悲の心
が少しもないことで、之を餓鬼の心といふ。瞋とは些細の事に前後の辨へ
もなく目に角立て、怒ること、之は修羅道に墮する本となるものである。

癡とは癡の心で、智慧とは正反對で、常に智慧の明を覆ひ味ます無明となる。「三毒の重きは愚癡これ本なり」とあつて、愚癡は八萬四千の煩惱の根元をなすもので、遂には畜生道に墮する本となる。

此三毒を三つの色に配して、貪は青、瞋は赤、癡は黒とする。其の中で貪癡の二毒が甚しいので明王は青黒の二色を示現し給ふのである。また青は虚空の色なれば天を表し、黒は土の色なれば地を表したものだともいふ。暴惡の相に似たりとは忿怒の相をいふたのである。

執智慧劍害貪瞋癡

智慧の劍を執つて貪瞋癡を害し。

是は前述の大刀劍と同じで、明王の大智力を示したもので、右の御手に持ち給ふ劍をいふ。前段にも述べた如く貪瞋癡の三毒は諸の煩惱の中で最も甚しいものであるから、明王の大威力によつて之を打亡し給ふのである。

爰に下總國生實の大巖寺の開基、道譽上人は十三歳で生國和泉國の寶圓寺に入つて出家せられたが、生來の魯鈍は致し方なく、如何に刻苦修行を勵むとも何の甲斐もないので、今は佛の功力による他に道が無いことを悟つて東に下り、成田山不動堂に參籠して立願三七日の斷食祈念、滿願の夜は心身共に綿の如く疲れ、思はず暫しまごろむ夢の内に不動明王は忽然として出現し、兩の御手に大小二振の利劍を執り給ひ、赫然として曰ふやう、「汝己の魯鈍を改めんとて我を念ずること殊勝の至りである。只今如の願

を叶へさせん。

先づ此の劔を呑み身内の悪血を浄めよ。此の二振の内何れを呑まんとするか」と。上人は謹んで「長短何れを呑むとも劔の身體を破ることは同じなれば、願はくば大劔を頂戴仕る」と答へた。明王は躍然として大劔を振つて上人の喉を刺し貫き給ふたので、上人はアツと叫んで血を吐くこと升餘、遂に其場に問絶して了つた。聽て夜が明て寺僧等が堂に上て見れば、年若い僧が紅に染つて倒れて居るので驚いて介抱した所、始めて夢から覺めたやうに起き上つて有し次第を物語つたので、寺僧等も共に明王の靈驗の顯たかなのに感じ入つた。上人は吐血升餘に及びながら身の内にいさゝかの痛惱をも覺えず、却つて心身共にすがくしく、暗雲を拂ふた明月の心持

で生れ甦つて達智高德の名僧となられた。當時の血染の法衣は今も大巖寺の寶物として保存されてゐる。之は正に明王の智慧劔の威力によつて三毒の根元たる癡の毒を斷じたまふた有名な御利生である。

(三盛堂發行「成田山案内記」に依る)

或持三昧索繫縛難伏者。

或は三昧の索を持して難伏の者を繫縛し。

之も亦前述の絹索と同じで、左の御手に持ち給ふ索をいふたので、この索は不動定の徳を具現したものの故に三昧索といふ。この索を以て縛された悪鬼惡魔は所謂不動の金縛で、少しも動くことが能きず、悉く善心に立ちか

へるごのことである。金剛盤石、迦樓羅焰、智慧劍、三昧索、何れも皆明王の大慈悲の顯れである。

常爲天龍八部之所恭敬。

常に天龍八部之爲に恭敬せらる。

天龍八部の諸衆は明王の大慈悲に感銘して心から其徳を讃へ崇敬し奉るごのことである。

若纔憶念是威怒王能令一切作障難者皆悉斷壞一切魔衆不敢

親近。

若し纔に是威怒王を憶念せば、能く一切の障難を作す者をして皆悉く

一切の魔衆を斷壞せしめ、敢て親近せざらん。

若し一切衆生が障礙災難に遇ふ時にも纔かでも此明王を信仰してをれば、明王は此人の心想の中に宿し給ふて御守護下さるから如何なる鬼神惡魔でも御威徳に恐れて此信者の前には近づくことが能きぬ。憶念とは心に銘じて忘れぬこと、即ち心想の中に明王の御影を宿すことをいふ。

常當遠離是修行者所住之處。

百由旬内無有魔事及鬼神等。

常に當に是修行者所住之處を遠離して、一百由旬の内に魔事及び鬼神等有ること無からしむ。

此明王を祈念し奉る行者には鬼神惡魔は恐れを做して、其行者の家から四千里も遠くに放れて、それより内へ一步も近づくことが能きぬ。この威大な明王の御功德は筆紙や言語には到底述べ難く、唯々尊み敬ひ奉るの外はないのである。由旬とは天竺の里程で、四十里を以て一由旬とする。故に一百由旬は四千里に當る。

時金剛手説最勝根本大陀羅尼曰。

時に金剛手、最勝根本大陀羅尼を説いて曰く。

十三丁目の「有大威怒王云々」から前段の「無有魔事及鬼神等」までは金剛手菩薩が妙吉祥菩薩に對して大明王の御威徳を逐一詳細に告げ給ふた御言葉で、茲に時とあるは前段で一段落となつた御言葉を、更に改めて説き給ふをいふ。最勝根本とは、一切衆生救済の根本であつて此上もなく勝れたものであるといふこと。

大陀羅尼は大眞言のことで、之は大火界呪、慈救呪等の極秘を藏する、不可思議の大妙呪であるから絶対に梵語のまゝ誦し奉るのである。

曩莫薩縛、怛他藥帝毘藥薩縛目。

契毘藥薩縛怛他羅吒贊拏摩訶
路灑拏欠佉呬佉薩縛尾覲南
咩怛羅吒悍曼。

之は呪の密語であるから譯することが能きぬ。

本經の中には此の他に二章の大陀羅尼がある。この陀羅尼こそ本經の根本であつて、秘密陀羅尼經と申すのも其の故である。

纒誦是眞言。出大智火。焚燒一切。

魔軍。

纒に是の眞言を誦すれば大智の火を出して一切の魔軍を焚燒す。

纒かでも此不可思議の大妙呪たる大眞言を誦するならば、明王は大智の火なる迦樓羅焰を以てたちごころに煩惱の魔軍を打亡ぼし給ふ。

尤も誦するといふても口先や腹の中で、或は魚や肉をつゝき乍ら道樂に、上の空で唱へた所で御利益のあらう筈はない。唯一心に明王を念じ、「其心不驚。住不動定」の大決定心を以て、纒か一度でもよいから心の底から此の大眞言を誦するならば、其の御利生は直ちに現證となつて顯れることは少しも疑ひないのである。纒かには斯る意味である。前述の「纒憶念

云々」と對照せば其の眞意を覺ることができやう。

三千大世界咸被大忿怒王威光

焚燒成大火聚

三千世界、咸く大忿怒王の威光に焚燒せられて大火聚となる。

三千世界とは宇宙といふことで、一つの日月に照されてをる所を一小世界といひ、これが千集つて小千世界、この小千世界が千集つて中千世界、中千世界がまた千集つて大千世界、此大中小の千世界を總稱して三千世界といふので、之は宇宙の廣大無邊なことを具體化した言葉であつて、一々數字に拘泥する必要はない、此無邊の大数据に蟠まる惡鬼惡魔は咸く明王の

御威光の爲に燒き盡されて一團の火の塊となつてしまふ。

唯除十地菩薩等一切佛土

唯十地菩薩等の一切の佛土を除きて。

十地とは、第一乾慧地、第二性地、第三八人地、第四見地、第五薄地、第六離欲地、第七己辨地、第八辟支佛地、第九菩薩地、第十佛地の十地をいふ、佛土とは佛菩薩の住し給ふ淨土をいふので、東方に阿閼如來、西方に阿彌陀如來、南方に寶地如來、北方に釋迦如來の淨土があり、其他十方世界には無量の佛菩薩方の在す佛土がある。之を一切佛土といふ。

燒諸冥衆後以法藥令得安穩

諸の冥衆を焼き、後に法藥を以て安穩を得せしむ。

迷界の冥い所に隠れて居て様々衆生を惱ます種々の惡魔外道を諸冥衆といふ。明王は前述の一切佛土に住するものを除いた、他の諸冥衆を悉く焼き亡し其惡を懲し給ふけれども、後には改めて慈悲法藥の妙藥を與へて御救ひなされ安穩を得させ給ふのである。

時金剛手而說偈言。

時に金剛手も、而も偈を説いて言く。

偈とは佛の功德を稱讚した一種の詩である。金剛手菩薩は廣大無邊の明王の御徳に自から感激せられて偈を以て其功德を説き給ふたのである。

若持是眞言。成就無傾動。

若し是眞言を持てば、無傾動を成就して。

是眞言とは前掲の最勝根本大陀羅尼をいふ。持てばとは常に心の中に誦して怠らぬこと。無傾動とは一切の煩惱を斷つこと、即ち心が動き傾いて常に定まらぬのは皆煩惱のなす業であるから眞言の威徳で其を斷つのである。

燒諸往昔罪。降伏大魔王。

諸の往昔の罪を焼き、大魔王を降伏して。

一切衆生が無明煩惱の爲に過去に犯した諸の罪業を残らず明王の大智の火を以て焼き亡し、貪瞋癡三毒の大魔王を悉く降伏させて、凡夫其儘を佛體

となし給ふのである。

所求一切事。隨持得成就。

所求一切の事。持つに随つて成就することを得ん。

尙また明王を信仰して常に是眞言を持つてさへ居れば、衆生の願ひ事は何んな事でも必ず成就することができぬ。

十二大天等。常來而加護。

十二大天等。常に來りて加護し給ふ。

十二大天等とは次に掲げる十二の天王をいふ。此の十二大天が常に明王の信者の傍を離れず常に御加護下さるのである。

東北伊舍那。東方帝釋天。

東南火光尊。南方焰魔天。

西南羅刹王。西方水雨天。

西北吹風雲。北方多聞天。

上方大梵天。下方持地天。

日天照衆闇。月天清涼光。

是等十二の大天王は大威神力を以て常に十方世界を守らせ給ふのである。

如^レ是^レ大力天。而^レ來圍遶^ニ彼^一。

是の如き大力天、而も來りて彼を圍遶せん。

右の如く大威神力を有し給ふ諸天王達は、常に降臨在^ニして信者の家を十重廿重に圍んで守護して下さるのである、彼とは明王の信者をいふ。

或^ニ蒙^ニ明王^一伏^ニ。還^ニ敬^ニ作^ニ擁護^一。

或は明王の伏を蒙り、還つて敬んで擁護す。

また或時は明王の仰を蒙つて、右の十二天王の中の何れの御方が、信心深い衆生を特別に護つて下さることである。

使者^シ矜羯羅。及^シ與^シ制吒迦。

使者の矜羯羅、及び制吒迦。

使者とは明王の御使をいふ、矜羯羅童子は明王の左側に立つて天衣をつけ、袈裟をかけ、蓮華の寶冠を頂き蓮華の一莖を持し給ふ、制吒迦童子は左側に立つて頭に五髻を結び、天衣を纏ひ、右手に金剛棒を杖についてゐる。此二童子は共に八大童子の一人である、一體八大童子といふのは四佛四波羅蜜の徳を表現したもので、矜羯羅童子は法波羅蜜の徳を示し制吒迦童子は業波羅蜜の徳を示したものである。そして此二童子は明王の福德と智慧との使者であるといはれて居る。又兩者の身相より見て男女の赤白二諦を

表したものともしふ。

俱利迦龍王。藥廁拏使者。

是は何れも童子以外の御使者である。俱利迦龍王は大魔王の一人で、或る時不動明王と通力を争ふたことがある。其時明王は法力を以て龍身を現じて魔王の劔に巻きつき、遂に之を降伏させ給ふた。龍王は明王の威力に恐れて魔業を捨て佛法に歸依し、明王の使者となつた。また明王は魔王退治の時は自から此龍王と現じ給ふことがある。之を俱利伽羅不動尊と申す、劔に纏ふた龍は絹索の變形である。

如是大眷屬。或隱或顯來。

奉仕修行者。如敬於世尊。

是の如き大眷屬、或は隠れ或は顯れ來りて。

修業者を奉仕すること世尊を敬ふが如くならん。

右の二童子を始め、八大童子三十六童子其他數多の使者眷屬が影の形に添ふが如く、蔭になり日向になつて信仰の行者の爲に集り來つて奉仕すること。とは如來を敬ひ如來につかへる如きである、明王の功德の威大なことは甚深無量であつて有り難い極みである。

若爲大根者。現聖者忿怒。

若し大根の者の爲には、聖者忿怒を現じ。

如何なる困難、迫害、誘惑に遇ふとも少しも動ずることなく、根強い信仰心と破邪の勇猛心とを持つた信者を大根の者といふ。斯の如きものには不動明王の御姿を現し給ひ、御自身に御利益を御與へ下さる。前に掲げた大巖寺の道譽上人などは大根の行者であらう。聖者とは明王の御事、忿怒とは申すまでもなく明王の御姿をいふ。

根性中根者。得見二童子。

根性中根の者は、二童子を見ることを得ん。

大根の者程の根強さはないけれども、自己を反省する力を充分に有するものを中根の者といふ、斯様な人には矜羯羅、制吒迦の二童子を遣し給ふて

御利益を授けて下さる。

昔、遠藤盛遠は源渡の妻袈裟御前に戀した間違から、遂に其の袈裟を殺したことを大いた後悔して、其事を出離の縁として直ちに出家得道し、文覺と名乗のて全國の靈山を廻つて修行した。そして紀州智那瀧に荒行をした折、矜羯羅、制吒迦の二童子が現れて苦死した文覺を蘇生させ給ふたことは有名な話である。これは中根者の例と見られる。

若下根行人。生怖不能見。是故大明王。爲現親友形。

若し下根の行人には、怖れを生じて見ることを能はず。

是れ故に大明王、爲に親友の形を現じ。

信仰心の乏しい意志の薄弱な我々凡夫を下根の者といふ。斯様なものには明王の法體を拜すること不可能である。そこで明王は之等下根の凡夫を憐み給ひ、親友の姿を以て現はれ、或は親や友の身に乗り移たりして其人を教へ導いて信心を喚起せしめ給ふのである。

如是隨根性、而作大利益。

漸漸誘進彼、入於阿字門。

是の如く根性に随つて、而も大利益を作し。

漸々に彼を誘進して、阿字門に入らしむ。

明王は前述の如く信心の根性に随つてそれ相應の利益を授け給ひ、下根、中根の者をも段々に誘ひ進めて誰彼の差別なく、皆悉く大日如來の阿字門に御入れ下さるのである。阿字門とは如來の在す所で金剛界、胎藏界の兩部の淨土をいふ。この阿字は水晶の珠の如く清淨の光を放ち、亦是黄金の如く、日月の如く、光明赫々として遍く十方世界を照し、其光は上は佛界に輝き一切衆生を濟度の門に趣かしめ、下は五濁惡世の衆生界を覆て無明煩惱の大闇黒を破るといふ。其利益の廣大にして無邊なことは逆も量り知ることは能きない。この阿字門こそ眞言極秘の奥儀であつて、中々小冊子の能く述べ盡し得る範圍でない。宜しく學匠に就いて修得すべきである。

爾時。金剛手菩薩。說是偈已。普觀大衆。而告之言。

爾時、金剛手菩薩、是の偈を説き已つて、普く大衆を觀て而して之に告て言く。

金剛手菩薩は右四十句の明王奉讚の偈を説き終つて、此説法の坐に集つた大衆を見渡し給ふて再び御説法をなさるのである。

善哉大會。皆由宿善故。今來得聞。如是明王及大力神呪。

善哉大會、皆宿善に由るが故に、今來つて是の如く明王及び大力の神呪を聞くことを得たり。

善哉大會とは、説法を聽聞せんと集つた大衆の殊勝な心根をお喜びなされて御讚め下さつた金剛手菩薩の御言葉である。宿善とは前世に善い行ひの種を蒔いて置いたので今生に於て善い根を張り善い果を宿すに至つたことをいふ。斯様な譯で今茲に來て此有難い明王の御利益や最勝根本の神呪を聽聞することが能きたのも過去の因縁が善がつたからである。

若欲見是大明王者。應修捨身修行法。復説眞言曰。

若し是大明王を見んと欲せば、應に捨身修行の法を修すべしと。

復眞言を説いて曰く。

捨身修行とは、凡身を捨て佛身を拜すこと、即ち五塵六欲、三毒煩惱にけがれた凡身を焼き捨て溜ひ淨めて如來の光明を目指して勇往邁進すること
をいふ、面りに明王を拜し奉らんと欲せば此法を修行せねばならぬ。

曩莫三曼多縛日羅赧怛羅吒娑
慕伽戰拏摩訶路灑拏娑破吒也
娑曩也阿娑荷阿三忙銀爾吽吽

尾觀南吽怛羅怛悍曼

前にも述べた如く大陀羅尼の神呪であるから譯さぬのである。

修眞言行人 持誦是眞言

從身放光明 降伏諸魔王

眞言を修する行人は、是眞言を持誦せよ。

身従り光明を放つて、諸の魔王を降伏す。

修身言行人とは當宗の信者のことをいふ。持誦とは眞言を心に刻みつけて朝夕怠らず誦へ奉れよとのことである。

然すれば眞言の功力によつて信者の身からは光明を放つて諸の悪魔煩惱を退散させて了ふ。

所求一切事。隨持得成就。

是故名護身。能得無恐怖。

所求一切の事、持つに隨つて成就することを得ん。

是故に護身と名け、能く恐怖無きことを得ん。

何な願望でも明王を信じて此眞言を持誦してさへをれば必ず成就する、そして明王は常に其人を守護して下さる。故に此眞言を護身と名けるので、是さへ持つてをれば世の中に恐しい物怖い物は何にも無くなつて了ふ。

亦有眞言明。名加護住處。

遠離諸惡怖。常得勝安穩。

亦眞言の明あり、加護住處と名づけ。

諸の惡怖を遠離して、常に勝安穩を得ん。

亦こゝに加護住處と名ける靈驗の明かな眞言があつて、信者の住處から諸の惡災を退散させて、常に安穩に御守護下さるのである。

彼大眞言曰。

彼の大眞言に曰く。

彼の大真言とは加護住處の妙呪をいふ。

曩莫三曼多縛日羅赧怛羅吒阿
慕伽贊拏摩訶路灑拏娑頗吒也
薩縛尾覲南摩娑縛娑底扇底
始鏤茗阿左羅黨矩嚕怛羅摩也
怛羅摩也吽怛羅吒悍曼。

是も亦前に云ふ如く秘文であるから譯すことは能きぬ。

金剛手言一切衆生。意想不同。是
故如來。或現慈體。或現忿怒。教化
衆生。

金剛手言く、一切衆生意想同じからず、是故に如來或は慈體を現じ、
或は忿怒を現じて衆生を教化す。

金剛手菩薩が仰せらるゝには、一切衆生の各々が皆思ひ想ひに異つた心を
持つてゐるので、大日如來も或は慈悲の相を顯し、或は大明王の忿怒の相
を現し給ふ等、種々の方便を盡して衆生を教へ導き給ふのである。

各各不同隨衆生意而作利益。

各々不同なり、衆生の意に随つて而も利益を作す。

衆生の心が別々であるから明王も亦衆生の各々の心持に随つて機に臨み時に應じて利益をお與へ下さると、之は前述の言葉と同じ意味である、斯様に同意義の言葉を度々繰り返して説くのは經文の常であつて、皆その意味強める爲に斯くするのである。

雖破魔軍後與法樂雖現忿怒內心慈悲。

魔軍を破ると雖も、後に法樂へ與へ、忿怒を現すると雖も、内心は慈悲なり。

魔軍を破るといふても夫は惡を懲す爲であるから、其惡を捨て善に立返るものには法樂といふて、此上も無い善びと樂みとを御與へ下さる。

明王は面にこそ忿怒の形相を現し給ふけれども内心は大慈大悲の御本體に在す

如摩醯首羅者得第八地慈善根力應以知之。

摩醯首羅の如きは第八地を得て、慈善根の力あり、應に以て之を知る

摩醯首羅は自在天とも申し色頂天の主である。元は第六地に住する魔王であつたが、明王の功德によつて第八地に登つて慈悲善根の大威力を授かり、佛法守護の大善神となることができた。之を以ても明王の御利益の尊きを知ることが能きる。第六地、第八地などは何れも十地の中で、之は第一佛地即ち佛の覺に到る道程段階を譬へたものである。

説是語已復告大衆若欲成就如

是法者入於山林寂靜之處求清

淨地建立壇場修諸梵行作念誦

法即見本尊圓滿悉地

是語を説き已りて復大衆に告げたまはく、若し是の如き法を成就せんと欲せば、山林寂靜之處に入り、清淨の地を求め壇場を建立して諸の梵行を修し念誦の法を作さば、即ち本尊を見、悉地を圓滿せん。

以上の如き御言葉を説き已つた金剛手菩薩は、更に復大衆に向つて仰せらるゝには、斯様な無盡の功德を成就しやうと志すものは、先づ山の上或は林の中のやうな都べて静かな淨らかな場所を撰んで、其處に齋壇を設け、護摩誦經などの梵行を修して深く明王を祈念し奉るがよい、然すれば御利

益は思ひの儘に成就することが能きる。

梵行とは佛法の總べての修行を行ふて清浄な生活をする事。圓滿悉地とは數多の願ひ事が一つも欠けることなく悉く成就することをいふ。

或入河水而作念誦。

或は河水に入りて念誦し。

或は又清い流の河に入つて祈念せよと昔役の行者が吉野川の水上に身を清め苦行せられたのも、前述の文覺上人が那智の瀧に荒行をなしたのも皆この經文による。また神道の禊の祓といふのも之と同じで、何れも煩惱の穢を洗ひ浄めて信念を強める行である現在では畧して水垢離といふて井水を

以て身を潔める、形式に多少の相違はあれど凡ゆる宗教に此事がある。

若於山頂樹下塔廟之處作念誦。

法速得成就。

若し山頂、樹下、塔廟之處に於て念誦の法を作さば速かに成就することを得ん。

山の頂や樹の下などの塔や廟のある所は何れも清浄な所である。此塔廟は佛の守護し給ふ所であるから、斯様な所で祈念すれば忽ち御利益がある。

或於安置般若經處作之成就。

或は般若經を安置する處に於て之を作さば成就せん。

般若經とは大般若經のことで、之は佛法の眞理を細大漏さず書き盡した經文で、六百卷といふ大部のものである。其中の理趣分といふのは有ゆる御經の中で最も尊いものとされてゐる。般若心經は是から出た御經で、その功德の大きなことは今更申すまでもないことである。

如是修時。整其三業。不造衆罪。

是の如く修する時は其の三業を整へ衆罪を造らず。

三業とは身、口、意の三つがなす業をいふ。兎角凡夫は口に惡を言ひ、意に惡を思ひ、身に惡を行ふもので、之が皆苦惱の種となつて益々煩惱を強

め佛心を傷つける。前述の様な清淨な場所では祈念する時は其の功力によつて之等の煩惱を滅し、惡業を淨め、三業は自から整ふて衆の罪業を造ることがない、之を三業具足といふ。即ち身、口、意の悉くが佛心を具足するとの意である。

亦不親近諸餘惡人。作諸護摩事。速得悉地。

亦諸餘の惡人に親近せず、諸の護摩の事を作さば速かに悉地を得ん。

昔から「朱に交れば赤くなる」といふ諺がある。これが凡夫の常で、眞に成佛を願ふものは努めて惡を遠ざけ、進んで善に親み、一心に明王に祈念

せねばならぬ。護摩の事とは、智慧の火を以て煩惱を焼き拂ふ祈願で、薪を焚て火を燃やし一心に明王を念ずることをいふ。

不食五辛酒肉作之成就。

五辛酒肉を食せず之を作さば成就せんと。

五辛とは大蒜、葱、韭、蘭葱、興渠の五つをいふ。酒は五戒の一つである。肉とは鳥獸魚鼈等の肉食をいふ、斯様なものを飲食するときは体内の血液を濁し従つて貪瞋癡の三毒を盛ならしめ、殊に色欲を高め精神を惑はし菩提の障となるので佛は之を食することを戒め給ふた。猶肉食は殺生戒を破るることにもなる。是等のものを食せねば佛の御心に叶ふわけである。

而説偈言。

而して偈を説いて言さく。

若能行是行。功德不可量。

如法作念誦。即得大悉地。

若し能く是行を行すれば、功德は量る可からず。

法の如く念誦を作さば、即ち大悉地を得ん。

若し信仰の深いものがあつて、是まで説いてきた通りの修行を行ふならば、量り知ることの能きぬ程の大利益を蒙り、また是經文の如くに祈念して

怠りなかつたならば、大願成就は疑ひない。

行者修苦行。或心想事成清淨。

三洛叉數滿。常得見本尊。

行者は苦行を修し、或は心想事成清淨にして、

三洛叉數に滿つれば、常に本尊を見ることを得ん。

山林に別け入り、或は河水に身を浸し、或は山頂樹下に安座して祈念苦行をなし、亦心を清淨にして陀羅尼眞言を念誦すること、三洛叉の數に滿つれば斷えず大明王の御姿を眼前に拜することを得るのである。三洛叉とは三十萬遍陀羅尼眞言を誦へることをいふ。

根來の覺鑊上人は明王の信者として道德勝れた名僧であつたが、凡僧輩の嫉みをうけ、或る時上人を害せんと多勢で寺を襲ふた。此時上人は明王の壇上で聲高らかに祈念の最中であつたので凡僧どもは好機逸すべからずと室内に闖入したが是は如何に、上人の姿はなく壇上に唯同様の二體の不動尊があるのみなので一同は呆れて手を空しふして引上げて了つたことである。斯様に堅固な信心に終始するものは常に明王を拜するばかりでなく、信力によつて其身が生ながら明王の御體を現顯する。之は明王の御心を體得して我と明王との境界を斷ち、我即ち不動なりの境地に住するからである

欲_レ驗_ニ法成_一者。 能_レ移_レ山及_レ動。

能_レ使_ニ水逆流_一。 隨_レ意作_レ諸事。

法成を驗みんと欲せば、能く山を移し及び動かす、

能く水を逆流せしめ、意に随つて諸事を作さん。

明王を祈念する行者が年來の修法の行力を驗みんとするならば、隨時隨所に其力を顯して能く大山を震動せしめ、河水を逆流せしめる等、一切世間の諸事を意の儘にすることができると。之は眞言の不可思議な威力を具體的に譬へた言葉である。

欲_レ見_ニ諸佛土_一。 明王忽出現。

頂_一戴_レ於_レ行者。 能_レ令_レ得_レ見_レ之。

諸の佛土を見んと欲せば、明王忽ち出現まします、

行者を頂戴して、能く之を見ることを得せしむ。

佛菩薩の方々の在す諸の淨土を拜したいと思ふ時は、忽ち不動明王は行者の眼前に現はれ給ふて、早速その行者を御頭の頂にさゝげて諸の佛土を巡り給ひ數多の淨土を參拜させて下さる。

何況_レ餘求_レ事。 隨_レ持_レ得_レ成就。

不_レ墮_二四_レ惡_レ趣_一。 決_二定_一證_二妙_レ果_一。

何に況んや餘の求むる事は、持に隨つて成就することを得ん。

四惡趣に墮ちず、決定して妙果を證せん。

諸佛の淨土を拜するなどは容易な事では無いが、明王の御威力を以てする時は前述の如くに寔に易々たる事である。大事すら斯の如くであるから其他の願事は眞言を持つてさへ居れば自然に成就する。四惡趣とは地獄、餓鬼、畜生、修羅四つの惡道をいふ。明王の智火法水に淨められた衆生は斯る惡趣に墮落するやうなことはなく、斯る衆生は佛の救ひを堅く信じて疑はぬから必ず佛の淨土に生れることが能きる。

如_レ是_レ諸_レ功_レ德_一。 我_レ讚_レ不_レ能_レ盡_一。

唯_レ大_レ聖_レ世_レ尊_一。 能_レ知_レ如_レ是_レ法_一。

是の如き諸の功德、我れ讚すれども盡す能はず、唯大聖世尊のみ、能く是の如き法を知りたまへり。

是まで説き去り説き來つた所の功德は如何に稱讚することも讚め盡すことが能きぬ。唯大日如來だけが此の様な有り難い御法を御存知である。

爾_レ時_レ佛_レ告_レ妙_レ吉_レ祥_レ菩_レ薩_一。 而_レ作_レ是_レ言_一。
若_レ未_レ來_レ世_一。 有_レ諸_レ行_レ人_一。 由_レ宿_レ福_一。 故_レ得_レ。

聞如^レ是^〇明王名號^一

爾時、佛、妙吉祥菩薩に告て而して是言を作したまはく、若し未來世に諸の行人有らば、宿福に由るが故に是の如き明王の名號を聞くこと得るなり。

毗盧遮那大會の中で金剛手菩薩が、妙吉祥菩薩並に一般大衆に對する御説法が終つた時に、大日如來が御自から妙吉祥菩薩に向つて仰せらるゝには、今から幾千萬劫の未來に到るまでも數多の行者は其修行の功德によつて福德の種を宿すから、それ故に斯様に有り難い明王の御名號を聞知ることを得るのであると。

或復受^レ持^一聖無動尊大威怒王陀羅尼經者當知是人無有横死亦無恐怖蒙諸天護持無諸障礙

或は復是聖無動尊、大威怒王陀羅尼經を受持する者は當に知るべし。是人横死有ること無く、亦恐怖無く、諸天の護持を蒙り諸の障礙無からん。

亦此の御經を受持して常に怠らず誦ふるものは、火難、水難、劍難等の厄災に遭ふて横死するやうなことは絶對になく、また如何なる不慮の災難に

逢ふこともなく、従つて世の中に恐怖といふことが無くなり、然かも晝夜の別なく諸天の守護の蒙るのであるから世の總ての障礙は悉く除かれて了ふ。諸天とは十二天、天龍八部衆などをいふ。

何況如上。作念誦者。其福無量。作是語已。默然而坐。

何に況んや上の如く念誦を作さば、其福無量なりと、是語を作し已つて默然として坐し給ふ。

前々段からは是迄は大日如來の御金言である。前述の如く陀羅尼眞言を受持するものは諸天の守護を受けて障礙があることがない。況して金剛手菩薩

が申したやうな種々の修業を作して明王を祈念するものは無量の福徳が得られると。斯く仰せられて他は何事も仰せなく唯默然と坐し給ふた。之實に金剛手菩薩の眞實無二の御證人である是を以て本經文の結句とする。

金剛手言善哉善哉。如大聖說。是言已。遂其本意。還著本座。

金剛手の言さく、善哉善哉、大聖の説の如し、是言を説き已つて、其本意を遂げ、還つて本座に著き給ふ。

金剛手菩薩は如來の御語を聞き終つて、其金言を稱讚せられ、明王の功徳は大聖世尊の御説の通てあると。斯て大會の聽衆に御説法を終り、年來の

御志を遂げ妙吉祥菩薩と共に如來の御前を退いて各御自分の坐に還られた。

爾時大衆聞說是經已各得勝位。皆大歡喜信受奉行。

爾時に大衆、是經を説くを聞き已つて各々勝位を得、皆大いに歡喜し、信受して奉行したりき。

諸佛諸菩薩を始めとして大會の聽衆は金剛手菩薩の説き給ふ有難い此御經を聞いて各々無上の覺を得て佛の御位に進むことができることを知り、悦ぶこと限りなく、皆欣喜雀躍して此御法を信じ御教の如くに修行を勵み奉

つたのでこの座の聽衆は皆な悉く即身成佛を爲ることができたのである。明王の功德の廣大無邊なことは實に仰ぐも尊とい極みである。

佛說聖不動經

爾時大會。有一明王。是大明王。

有大威力。大悲德故。現青黑形。

大定德故。坐金剛石。大智慧故。

現大火焰。執大智劍。害貪瞋癡。

持三昧索。縛難伏者。無相法身。

虛空同體。無其住處。但住衆生。

心想之中。衆生意想。各各不同。

隨衆生意。而作利益。所求圓滿。

爾時大會。聞說是經。皆大歡喜。

信受奉行。

爾時、大會に一の明王あり、是大明王は大威力あり、大悲の徳の故に青黒の形を現じ、大定の徳の故に金剛石に坐し、大智慧の故に大火焰

を現じ、大智の劍を執りて貪瞋癡を害し、三味の索を持して難伏の者を縛す。無相の法身にして虚空と同體なれば其住處もなし、但衆生心想の中に住したまふ、衆生の意想各々同じからざれば衆生の意に隨つて利益を作し、求むる所を圓滿せしむ、爾時大會、是經を説くを聞きて皆大いに歡喜し、信受して奉行す。

此一段は明王の大威徳を稱讚した御文で、是迄に説いて來た所の秘密陀羅尼經全文の要領を抄述したものである。

斯様に長い經文を譯して其の肝心を摘出して、短を以て要を得せしめたものは他にも尠くない。中にも彼の大般若經六百卷の心髓を僅かに心經の二百六十餘字に納めた如きは最もよい例である。

南無三十三童子。

南無とは梵語で歸命と譯し、身も心も佛の御心に任せ金言の如くに修行し、其處には少しの私心もまじえず、絶対に歸依し奉るといふ意味の言葉である。よく〜味ふべきである。

矜迦羅童子 制吒迦童子 不動慧童子

光網勝童子 無垢光童子 計子儼童子

智慧幢童子 質多羅童子 召請光童子

不思議童子 囉多羅童子 波羅波羅童子

伊醯羅童子 師子光童子 師子慧童子

阿婆羅底童子 持堅婆童子 利車毗童子

法挾護童子 因陀羅童子 大光明童子

小光明童子 佛守護童子 法守護童子

僧守護童子 金剛護童子 虛空護童子

虛空藏童子 寶藏護童子 吉祥妙童子

戒光慧童子 妙空藏童子 普香主童子

善爾師童子 波利迦童子 烏婆計童子

以上を三十六童子といふ。觀世音菩薩の一體分身を三十三天に表して三十
三身を現し衆生を利益し給ふ如く、是等の童子は皆明王の御分身である。
尤も配すれば諸佛諸菩薩の別號となるが畢竟は大日如來に歸一せられるの
である。童子とは梵語の狗摩羅といふ語を譯したので、廣韻といふ書に
「童は獨なり」とあり、また説文には「未だ冠せざるものゝ名なり」とあ

り、昔は二十歳になると成人した印に初めて冠をするのが禮であつたといふことが禮記といふ書に見えてゐる。また釋名に「十五を童といふ」とある。また昔高貴の人の御側使ひに小性といふものがあつた。この意味で三十六童子は明王の御手足の如くに動き給ふ明王の御小性であつて、各童子の一人々々が明王の無量御徳を分擔し給ふのである。

聖無動眷屬。三十六童子。

各領千萬童。本誓悲願故。

千萬億惡鬼。燒亂行人時。

誦此童子名。皆悉退散去。

聖無動の眷屬、三十六童子。

各々千萬童を領す、本誓悲願の故に。

千萬億の惡鬼、行人を燒亂せん時、

此の童子の名を誦ふれば、皆悉く退散し去らん。

明王の御眷屬の三十六童子の各々がまた千萬の大眷屬を領し給ふことは此の大眷屬を以て大魔軍を撃退なさんとの大慈大悲の御誓願を成就せしめ給はんが爲である。故に明王を念ずる行者が千萬億といふ數限のない惡魔鬼神の誘惑危難に逢ふて其の信行を亂さるゝ時でも、此童子の御名を誦へて

祈念するならば、三十六童子は各々無量の大神屬を率ゐて現れ、惡鬼魔軍を懲し給ふゆへ、彼等は悉く逃げ散じて了ふ。

若有苦厄難。呪詛病患者。

當呼童子號。須臾得吉祥。

若し苦厄の難あり、呪詛病患の者は、

當に童子の號を呼ぶべし、須臾にして吉祥を得ん。

苦厄の難とは四苦八苦の苦難をいふ。一切衆生が此世に生れ出たからには有ゆる苦みを受けねばならぬ。之は免れられぬ運命であるので生苦といふ。又若いものは次第に老けて前途に不安を感ずるを老苦といひ、病を得て苦

むを病苦といひ、人生斷末魔の苦みを死苦といふ。此の四つを四苦といひ、其れに、父子夫婦が恩愛の情を斷つて別れ苦みの愛別離苦、他から怨み憎しみを請けて苦む怨憎會苦、求むる物事が思ふやうに得られずに苦む求不得苦、盛んなものは必ず衰へ行く不宏に苦む五盛陰苦、此の四つを加へて八苦といふ。殊に不慮の災難に遇ひ、或は他人の怨みをかつて呪詛を受け、或は難病に患ることがあつても此童子の尊號を呼んで信仰すれば、暫しの間に是等の惡災を轉じて吉祥と替へて下さるのである。

恭敬禮拜者。不離於左右。

如影隨形護。獲得長壽益。

恭敬禮拜する者には、左右を離れず。

影の形に隨ふが如くに護り給へば、長壽の益を獲得せん。

前述の如く童子の御名を呼ぶだけでさへ大きな御守護があるのだから、況して恭敬禮拜すれば、三十六童子の方々は其の信者の左右を離れず影身に添ふて御守り下さるので、悪い事は自然と消滅して善い事ばかり重つて天壽を全ふして長生することができぬ。

南無歸命頂禮大日大聖不動明王。四大八大諸忿怒尊。

歸命頂禮とは尊い御法を頂く爲に身も心も佛に捧げて禮拜供養すること

とをいふ。大聖不動明王は無量の諸佛の總帥たる大日如來の御化身であつて、和光同塵兩部習合の神明であるから、三禮を盡し此尊號を三度繰返して稱へ奉るのである。これは身口意の三業を以て三拜する相を顯す爲である。又神道では神を禮拜する時は拍手を二度うつて再拜するが、是は神は天地の二氣であり、人も陰陽の二氣から生ずる故に其二氣を象つて再拜するのである。

南無八大童子。慧光童子

此童子に一切衆生結生の根本羯羅藍の初位に在し東方寶幢佛の輪身である右の御手に五鈷を持つは聖凡二界男女和合の表相であり、亦左の

御手に蓮華を持つは胎藏界の心たる八分の肉團を表し、御額の月輪は金剛界の心たる圓明の菩提を示す。

慧喜童子

此童子は阿部曇の第二位に在し南方開敷花王佛が教令の輪身である。左の御手に寶珠を持つは平等性智を表し、亦右の御手に三鈷杵を持つは南方第七識の理智事三轉を秘藏することを示したものである。

阿耨達多童子

此童子は西方無量壽佛の妙觀察智による教令の輪身で、阿耨達とは無上菩提といふ義である。中尊の證菩提門を司るによつて其名がある。

左の御手に蓮華を持つは衆生を開示して苦厄を抜く妙蓮不染の内證蓮華三昧を表し、右の御手に一鈷杵を持つは西方證菩提一實の智體を示す。また龍に駕し給ふは龍が雲を起して雨を降らせ草木を潤す如く、一切衆生を大慈の徳を以て潤すことを表したものである。

指徳童子

此童子は北方不空成就佛の外迹である。左の御手の三鈷杵は未發心の迷界の三業を表し、また右の御手に持つ鈴は迷界の衆生を呼び覺ます爲のものである。

烏俱婆識童子

此童子は辰巳の方に位し金剛手菩薩の輪身である。五鈷の冠を戴くのは五惡の身を表し、右の御手に一鈷を持つは一圓明の無垢の菩提心を示すものである。

清淨童子

此童子は未申の方に位し妙吉祥菩薩の輪身である。左の御手に持つ梵篋には經卷を納め妙觀察智の文字の説法を表し、また右の御手の五鈷は彌陀一門の五智を表す。

矜迦羅童子

此童子は戌亥の方に位し觀世音菩薩の外迹である。白色の身相を以て

白蓮華の寶冠を戴くのは慈悲忍辱の徳を表す、故に定慧の二手を合掌して中位に向ひ給ふ。

制多迦童子

此童子は丑寅の方に位し彌勒菩薩の外迹である。大智を司り、赤色の身相は智火を以て瞋恚を調伏することを示し、頭に五髻を結び金剛棒を持つは強剛堅實なる思想を表示したものである。

稽首無動尊秘密陀羅尼經

稽首とは佛に對する最敬の禮で、南無と同じ意味の言葉である。

王十
稽首聖無動。摩訶威怒王。

極大慈悲心。愍念衆生者。

聖無動を稽首せば、摩訶威怒王は、

極大の慈悲心をもつて、衆生を愍念したまふ。

稽首聖無動とは南無大日大聖不動明王といふ義である。又摩訶は既に述べた如く梵語の大で、摩訶威怒王は即ち大威怒王で明王の御異名であることは是亦既に述べた所である。斯の如く明王は大慈大悲の御心に在す故に一切衆生を愍み給ふことが誠に切である。

本體盧遮那。久遠成正覺。

法身徧法界。智慧同虛空。

本體は盧遮那にして、久遠に正覺を成し、

法身は法界に徧く、智慧は虛空に同じ。

盧遮那は既に述べた如く梵語で大日如來の御事で、不動明王の本體本地が此如來であることは度々述べた通りである。明王は大日如來の御變身であるが故に久遠劫の昔に於て己に無上正等正覺を成就し給ふた法身の本佛に在し、大宇宙の如何なる所にても遍滿して居られる。亦明王の御智慧は宇宙の空間を超越して如何なる事でも爲し給ふ所の絶對の智慧なのである。

無相而現相。

相徧世界海。

無聲而有聲。

聲聞塵刹土。

無相にして相を現じ、相は世界海に徧し、

無聲にして聲あり、聲は塵刹土に聞こゆ。

法身の明王は肉眼にこそ見えぬが、精神界の嚴然たる存在であつて、その御姿は徧く慈悲の御聲は五濁六塵の娑婆世界にまで聞えて來る。

爲護持佛法。

爲利樂群生。

無邊相好海。

變現瞋怒相。

佛法を護持せんが爲に、群生に利樂せんが爲に、

無邊の相好海、瞋怒の相を變現す。

佛法を守護して群がる一切衆生に樂しみを與へんとし給ふ爲に慈悲忍辱海の如き無邊微妙の御相好を隠して忿怒の相を顯して大明王を現じ給ふのである。

慈眼視衆生。

平等如一子。

方便垂一髮。

表示第一義。

慈眼以て衆生を視ること、平等に一子の如し、
方便に一髮を垂れて、第一義を表示したまふ。

大慈大悲の明王の御眼から一切衆生を見るならば、彼是と差別のあるものでなく、善人も悪人も皆一様に我子の如くに思召すのである。故に御方便の一髪を垂れ給ふて衆生が覺の道に到る第一の要諦を示し給ふのである。方便垂一髪といふことは至極深秘の言葉であるから説明を畧する。

金剛智能斷 難斷諸煩惱。

執持猛利劍 一斷無餘習。

金剛の智は能く斷じ、難き諸の煩惱を斷じ、

猛利の劍を執持して、一たび斷じて餘習なし。

明王の金剛の御智慧の力は實に大したもので、衆生の如何なる力を以てし

ても到底斷切ることの能きない諸の惡趣煩惱を悉く斷じ給ふ。また明王の利劍を以て一度斷たれた煩惱は決して再び發る事がないとのことである。

金剛定能縛 難縛諸結業。

執持金絹索 一縛無能動。

金剛定は能く、縛し難き諸の結業を縛し、

金絹索を執持して、一たび縛して能く動くこと無し。

金剛定とは明王が金剛盤上に修し給ふところの不動定のことである、また諸結業とは煩惱の爲に衆生が犯すところの種々の罪業をいふ。金剛の定力は寔に威大で縛し難い衆生の罪業を悉く縛して了ふ。一度この金剛の絹索

を以て縛せられた罪業或は煩惱の悪魔は絶対に身動きができないのである。

究竟能取盡。煩惱毒龍子。

示現迦樓炎。焚燒業障海。

究竟能く、煩惱の毒龍子を取盡す。

迦樓炎を示現して、業障の海を焚燒す。

これは無明煩惱を毒龍に譬へ、此毒龍をも明王の御力で容易く取盡し給ふ
このこと、迦樓炎は迦樓羅焰のことで、衆生諸の業障を海に譬へ、其を
も容易に焼き亡ぼし給ふこのことである。

能護菩提心。令行者堅住。

安住盤石座。不退菩提行。

能く菩提心を護り、行者をして堅住ならしめ、

盤石の座に安住して、菩提の行を退かず。

菩提は梵語で正覺、佛智などと譯し、佛道無上の覺をいふ。是は人々が本
來具足する所の眞性であるが、衆生は無明煩惱に覆はれて此の眞性を發輝
することができぬ。佛を覺者といふのは此の眞性を覺るからである。

此眞性は常に平等で、佛にも衆生にも等しく平に行き渡つてゐる故に道と

いふ。一切衆生は道を求めることによつて生死流轉の迷の世界から救はれるのである。此道を求める心を菩提心といふ。明王は前述の如く總ての障礙を滅盡して求道者を御守り下さる。又此娑婆は火宅といふ常に安き心のない住み難い所であるが、信心堅固の行者には盤石に坐する如き安住を得せしめ、菩提の修行を保たしめ給ふ。

假使滿三千。大力諸夜叉。

明王降伏盡。令入解脫道。

假使三千に滿つる。大力諸の夜叉も、

明王は降伏し盡して、解脫の道に入らしめたまふ。

假使三千四千に餘る無双大力の夜叉羅刹共が押寄せて來ても明王を信する行者を障礙しやうとしても大明王は是等の惡魔を悉く降伏させて悔悟せしめ、解脫の道に入らしめ給ふので、之より是等の夜叉羅刹は佛法守護の善神となつて行者を護ることを明王に誓ふのである。

一持秘密呪。生生而加護。

隨逐不相離。必送華藏界。

一たび秘密の呪を持すれば、生々に加護し、

隨ひ逐ふて相離れず、必ず華藏界に送りたまふ。

一度此秘密陀羅尼の呪を誦ふるものには其の信者の生命のあらん限り加護

し給ふて、影に形の随ふ如く影身を離れず逐ふて屹度華藏界に御送り下さる。呪とは邪を拂ひ煩惱の障を除く言葉である。

華藏界は密嚴國土、或は華翼國ともいひ、大日如來が東方に建立し給ふた結構壯麗な淨土のことで、阿彌陀如來の西方極樂淨土と好一對の安樂國である。

念念持明王。 世世不忘失。

現前三摩地。 覺了如來慧。

念念に明王を持し、世世に忘失せざれば、

三摩地を現前して、如來慧を覺了す。

大明王を念々に頼み奉つて更に忘れることが無ければ、三摩地とて誠に結構な淨土を眼前に實現せしめ、如來と同等の覺を得せしめ給ふのである。

以此三業禮明王功德善。

平等施群生。 同證不動定。

此三業明王を禮する功德の善を以て、

平等に群生に施し、同じく不動定を證す。

三業禮とは行者の身、口、意の三業を以て明王を禮拜すること、即ち身に菩提の行を修し、口に秘密眞言の呪を誦へ、心に明王を念ずる、此三業を具足して明王を拜する衆生には功德の善果によつて幸福を施し給ひ、不

動定を體得せしめ給ふ。不動定を體得した者は處生上の不安恐怖が一掃される。

唯願徧法界。金剛秘密呪。

同住明王體。加持我三密。

唯願くは法界に徧き、金剛秘密の呪、

同じく明王の體に住し、我三密を加持す。

衆生は唯々法界に満ちあふる、金剛秘密の呪を誦へて明王を願ふがよい。さすれば無相無體の明王も忽ち其の呪の裡に御體を顯し給ひ三密の法とて如來の微妙なる三業を以て利益を垂れ給ふのである。

稽首明王力。令我悉地滿。

稽首明王力。令法久住世。

明王の力を稽首せば、我をして悉地を満たさしめ、

明王の力を稽首せば、法をして久しくして世に住せしめたまふ。

稽首とは前にも述べた如く敬ひ拜することである。明王の御力は衆生の願望を成就させ給ひ、また不老長壽をたもち永く此世に安住せしめ給ふと。

自界及他界。無盡世界海。

界中諸含識。同證無上覺。

自界及び他界、無盡の世界海、

界中の諸の含識、同じく無上覺を證せん。

我が住む國のものも、他國のものも、數限りもない世界中の諸の衆生も、

賢愚、明盲の差別なく此經を受持せよ。亦一切の天神地祇も千萬億の諸佛、

諸菩薩も皆此經を受持するがよい、三世の諸佛は之に因つて正覺を成就し、

一切衆生は之に因つて悉く成佛することが出来る。是即ち即身成佛の法

である

見我身者。

發菩提心。

聞我名者。

斷惑修善。

聽我說者。

得大智慧。

知我心者。

即身成佛。

我身を見る者は、菩提心を發し、我名を聞く者は、

惑を斷じ善を修し、我説を聞く者は、大智慧を得、

我心を知る者は、即身成佛すべし。

之は明王御自身の御言葉で、我どは明王の御事である。明王の御事は之

で説き來つた如く大威力ある御方であるから、其御姿を一度見たものは忽

ち菩提の心を發し、御名を一度聞く者は惑を斷つて善事を修するに到る。

又明王の御説法を聞くときは大なる智慧を得、明王の御心を知るものは忽

ち成佛することが出来るのである。

無始已來無量罪。

今世所犯極重罪。

日日夜夜所作罪。

念念步步所起罪。

眞言威力皆消滅。

命終決定生極樂。

無始已來の無量の罪、今世に犯す所の罪、

日々に作る所の罪、念念歩々に起す所の罪、

眞言の威力によつて皆消滅し、

命終らば決定して極樂に生せん。

是より以下は廻向文である。無始已來とは此世に生ぬ以前からといふこと
即ち前世の罪をいふ。其他今世に於て犯した罪、日々に念々歩々に作る
幾多の罪業も眞言の威力によつて悉く消滅して清淨無垢の身となり此世
の生命を終る時は直ちに極樂往生が出来るのである。

荷負引導師父母。

拔濟生死大苦海。

為^ニ我有^レ先亡^{マウ}者^{ジヤ}。

有^ウ緣^{エン}知^チ識^{シキ}男^{ナン}女^{ニョ}等^{トウ}。

大^{ダイ}作^サ方^{ハウ}便^{ベン}皆^{カイ}引^{イン}導^{ドウ}。

共^グ生^{シヤウ}安^{アン}養^{ヤウ}上^{シヤウ}妙^{メウ}刹^{セツ}。

荷負して師父母を引導し、生死の大苦海を拔濟し、

我が恩ある先亡の者、有緣知識の男女等の爲に、

大いに方便を作して皆引導したまへば、共に安養上妙の刹に生せん。

眞言の威力は行者信者を往生させるばかりでなく、師匠や父母の如き恩人

先輩の靈、其れにつながらる一切衆生を、明王は凡ゆる御方便を盡して導き

給ひ、安養上妙の極樂淨土に往生させて下さるのである。

乃至四恩諸衆生。

皆悉利益共成佛。

乃至四恩の諸の衆生、皆悉く利益して成佛せん。

四恩とは君の恩、師の恩、親の恩、社會の恩、この四つをいふ。皆之行者

の恩人であるから皆悉く利益を賜はつて成佛することが出来るのである。

斯様に唯一人の行者が誦へる眞言の威力が社會全般の衆生を悉く救ふこと

が出来るのである。寔や大明王の大威徳、大慈大悲の御誓願、仰げば彌々

高く實に尊信し奉るべき御靈徳である。

(まはり)

昭和十年二月廿五日印刷
昭和十年二月廿八日發行

經本目錄（呈燕代）

著者 邑樂泉人

印刷者 東京市深川區清澄町三丁目九番地
濱野治三



不動講義

東京市深川區清澄町三丁目九番地

發行所 各泉御經出版 三盛堂書房

振替東京一六七〇二番

終

